

「新書く新しい発見の書籍く」

株式会社三省堂書店 新宿店 関和 一樹

おじいさんがサービスカウンターにいる私に声を掛けた。大きく膨らんだポストンバックに紙袋を両手に持っている。ニコニコした表情がとても穏やかで、何か優しさが感じられる口調で私に書籍の在庫検索を頼んだ。探している本は落語に関する新書でさっそく書籍検索をした。すると当店に一冊の在庫表示があった。他の店舗には在庫がなく、もし当店になければ取り寄せで一〇日ほど時間はかかってしまう。

新書の棚は出版会社ごとに分かれているので、探すのはとても簡単だ。私はさっそくこの新書がある棚へと向かった。そして棚を探すがこの新書が見つからない。念のため棚の下にあるストックを探しても見つからない。

急いでサービスカウンターに戻り、おじいさんに取り寄せ対応になってしまったことを伝えると、「二〇日後にこちらに受け取りに来ることができないので…」と困った表情で私を見た。ゆっくりと椅子から立ち上がり、さっきまでのニコニコした表情で「ありがとうございます」と言い、再び両手に大きな荷物を持ちその場を去っていった。

あの優しげなおじいさんの期待に応えられなかったこと、在庫表示があったにもかかわらず棚になかったこと、見つけれなかったことに私は少しやるせない気分になった。どうしてもその新書を見つけない。諦めきれずに私はもう一度棚へと向かった。やはり先ほどと同様に棚にはその新書はない。ストックにもない。他にはと考えると、やはり先ほどと同様に棚にはその新書はない。ストックにもない。るのではないかと。夕方には明日の朝開梱されるダンボールが必ず一〇箱程度あるのだ。

無造作に積まれたダンボールから新書の入っている箱を探した。一番下にあつたが、あの優しげなおじいさんの期待に応えたいと思う一心でダンボールを取り出し、中に入っている新書を一冊ずつ確認した。その新書が出てきた。

おじいさんが立ち去ってから少し時間は経っていた。もうこの店内にいるとは限らない。それでも探し回ったが、やはりもう店内にはいないようだ。新書は見つけられたのに、渡すことができなかったという無念な気持ちだけが残った。

サービスカウンターに戻る途中ふとエレベーターの方に目をやると、人ごみの

中にあの大きな荷物を持ったおじいさんがいた。エレベーターが来る前にといい、私は急いで駆け寄った。先ほどのお詫びを言い、おじいさんの目当ての落語の新书を確認するように見せると、さっきまでの優しげな表情がさらに喜びの表情へと変わるのがわかった。

レジへ向かう途中、「おじいさんはこれから病院へ行き入院するのだ」と私に言った。だから大きな荷物を持っていること、一〇日後に受け取りに来られないことをすぐに理解した。何度も丁寧に「ありがとうございます」と言い、最後には深々と頭を下げておじいさんはお店を後にした。私も今までにない「ありがとうございます」を言いました。またどうぞお越しくださいます！」を言うことができたと思う。

まだあのおじいさんは入院しているのか、それとも退院できたのか、わからない。けれどあの一冊の新书によっておじいさんの病室での時間を少しは有益な時間に変えることができたのかと思うと、今でもあの時の喜びは忘れられない。私のお店には何千何万という書籍がある。その全ての書籍にお客様の満足と喜びが詰まっていることと思いつながら、毎日書籍と触れ合っていきたい。